

## 或る歴史的変質の時代と読書共同体の変容

### ——電子読書の試み——

加藤敬事

電子化時代の読書はいかなるものとなるのか？ 一つのテキストを、開発された読書ツールを使って読むことで、読書がその意味を深め、広めることができるか？ これはその実験結果の報告です。テキストとしては、藤田省三の『精神史的考察』の一編「或る歴史的変質の時代」を取り上げました。これは『東アジア人文書 100 冊』にも選ばれ、既に韓国語訳<sup>1)</sup>もあり、また中国語訳も近刊の予定と聞いており、テキストを各地域の言語で共有でき、読書共同体の構築という目標にも一歩近づくことができる、と考えるの選択です。

この論文のタイトルにある「歴史的変質」とは、日本の明治時代に起こった歴史的出来事を背景にしています [文末の年表参照]。およそ 1890 年代、1900 年代の 20 年間にわたる出来事です。思想史家の藤田はその変質を、福沢諭吉と板垣退助という二人の人物の言説から読み取ろうとします。この二人、ともに明治国家日本の立国に貢献した人物です。面白いことに、韓国語訳には、論文 1 篇 1 篇に口絵が添えられているのですが、この論文の口絵としては日本の 2 枚の紙幣が用いられています。1 万円札の肖像が福沢、今はお目にかかれない 100 円札が板垣というわけです。

この論文において藤田は、福沢の有名な、しかし逆説的でソフィスト的な一句に画期的な解釈を施しています。この論文の価値はそこにあります。そして、福沢の対極に板垣の言説を置くことで、明治国家に起こった歴史的変質を鮮やかに言い当てています。福沢は「立国は私<sup>わたくし</sup>なり。公<sup>おおやけ</sup>には非ざるなり。」と軽く言ってのけましたが、それは実に重い言葉です。藤田はその重みをよく知り、その重さを計って見せたのです。もともと、この一句は、旧権力、幕府の側にあって明治の立国に貢献し、なお新権力の中心にとどまった人物に対し、その功績と同時に旧権力の側にあった者としてのモラルを問うた文、『瘦我慢の説』の冒頭の一句です。1891 年に書かれましたが、公表されたのは福沢の死の年、1901 年です。

この句を、藤田は「『立国』事業を指して人類史的には『私事』なりとした。その冴え渡った一句」と最大限に評価し、それに加えて、こう言っています。[その個所を電子化されたテキストにマークして示します。その部分は自動的に文字表記もされます。]「いわば『私的』な責任や『私的』な信義を守る態度が、どれほど、社会的な生き方における『公的』な正しさを実現する際の中心になりうるものであるかということ、例によって知的な意外性に満ちた極端な例を挙げながら解き明かそうとする。」他にも、藤田は表現をさまざまに変えて、執拗なまでにこの一句の重さを伝えようとしています。例えば、福沢の口調を借りて曰く、「目下の日本にとって公の中の公である立国さえもが、絶

対的な一般性の世界ではただの私事となるのですぞ。だから私事は軽視すべき事ではないのですぞ。」あるいは『私情』の次元・生き方の次元と連関させられたことによって当時の『立国』は単なる政治的事業の平面を超えて『立国』精神の深みへと基礎づけられた」といった具合です。

福沢の「立国は私なり。公には非ざるなり。」の一句の対極にあり、歴史的変質を象徴する語とされたのが、板垣退助の一句です。それは『自由党史』に寄せられた序文のなかにあります。この本は、福沢の死から10年、日露戦争後5年の1910年に刊行されています。板垣退助は、自由民権の運動家として、また自由党総理として、帝国憲法の制定、帝国議会の発足に功労のあった人物です。板垣は、その序文で、維新改革の精神は憲政の樹立によって成就せられたのであり、またその結果として日露戦争の勝利はもたらされたのであり、とすれば、その功は自由民権派に帰せられるとしました。そして、序文の末尾に次のように記しました。「憲政有終の美是に於てか濟り、国運の隆昌、天壤と共に際りなからん。」藤田はこれを評して「国運隆昌の野放図な歌声」と呼びました。「野放図」という呼び方には、立国者が当初持っていた自国の弱小性についてのきびしい自覚、すなわち立国精神の深みが微塵もなく消え失せたことが示されています。立国をも一個の限定された当面の相対的価値とみなし、その彼方により普遍的価値を常に見すえようとした福沢の眼は、ここでは全く失われました。以来、野放図な歌声に包まれたまま、今から70年前の歴史的結末を迎える変質が、ここに完成したのです。

ここまで、藤田論文の要点だけを、いわば読書ノートの1ページとして示しましたが、つづいて本文を読む過程で私の思いついたことを、注として記しました。歴史的変質それ自体を体現したと考えられる作品とその作者の名、そしてその変質を象徴する事件です。

今年2015年は、干支でいえば乙未（きのと・ひつじ）の年です。韓国・朝鮮で乙未事変といえは閔妃暗殺事件を、中国で乙未条約は下関での日清講和条約を指します。今から120年前の乙未の年、1895年につくられ、この年に起こった出来事を描いた日本のゲーム、<sup>オゴロク</sup>双六をご覧にいます。これは北京の三聯書店から出た李昆武（リー・クンウー）のマンガ『傷痕』から採りました<sup>2</sup>）。このマンガを読みますと、日本にとっての歴史的変質とは、中国・韓国にとっての「傷痕」に他ならないことが読み取れます。

これからお話しする作品の作者は閔妃暗殺事件の首謀者の一人であり、作品の内容も深く事件とかかわっています。作者の東海散士、柴四朗は明治維新の年、滅び行く幕府の側で戦い敗れた会津藩の人間、言ってみれば「亡国」の人です。アメリカに留学し、帰国後に著したのが、政治小説『佳人之奇遇』で、当時ベストセラーとなりました。作者の経歴からすると、藤田の言う「立国が公道となる」ための条件、「衰亡の逆境」にあるという条件を備えた人物であるはずでした。それが板垣と同様、みごとに時代の歴史的変質とともに、作者自らもその作品も変質していくのです。

この本がベストセラーとなったことについては、挿絵の魅力も大きかったことは間違いありません。最初の挿絵は、アメリカのフィラデルフィアの独立閣という建物で、ここで作者である主人公は二人の美女と出会い、しかも彼女たちがアイルランドの独立と

スペインの自由を求める闘士と知って、亡国の悲哀を共に語り合います。2つ目はロンドンのテムズ川で彼女たちと再会する場面です。このようにロマンスと絡めながら、列強の暴虐に抗する美女たちをヒロインに小説は進行していきます。この長編小説の第1冊の巻末には、当時日本に亡命していた朝鮮の改革派の金玉鉤が、作者と志を同じくする者として跋文を寄せています。1885年に刊行を開始したこの小説は、1891年に第10巻の刊行をもって一旦中断します。その最後の挿絵は、朝鮮の守旧派の大院君の肖像です。そこで、作者は大院君を、立派な人物ではあるが国際情勢に暗いなどと評しています。中断後の作者は、韓国での生々しい現実の政治活動にのめりこみ、ついには閔妃暗殺の陰謀に加担するまでに至ります。続編は作者が囚われの身になってから書き継がれ、獄中で、死刑となった朝鮮の同志を夢見る場面で物語は閉じられます。最後は全くの私情の吐露です。

思わぬことに、この作品は東アジアの読書共同体で広く受け入れられる書となりました。中国語訳が広く読まれたのです。訳者は、戊戌の政変で敗れた改革派の梁啓超、日本への亡命の途上この書に出会い、彼が日本で創刊した新聞「清議報」の第1号から連載を始めます。中華書局から刊行された専集で『佳人奇遇』は梁啓超の著作となっているのを見ても分かりますように、その翻訳があまりにも名文であったがゆえに3)、もともと中国語の著作と思われ普及したのです。現に、ヴェトナムの独立運動家、潘佩珠(ファン・ボイチャウ)もこれを中国人の著作と思って読んだと言っています。日露戦争後、潘は日本に梁啓超を訪れ、梁は潘の『ヴェトナム亡国史』に感動し、序文を付して自らの手で刊行します4)。この作品は東アジアの読書共同体に、政治小説という新しいジャンルをもたらし文学革命に寄与しました5)。その一方で、作者を取り巻く歴史的現実から、作者の元来もっていた世界に開かれた眼6)が東アジアに限局され、歴史的変質それ自体を体現するものとなりました。また、それと同時に、東アジアの読書人の目が西欧世界に向けられ始めたことで、東アジア読書共同体の最後の瞬間を告げる作品ともなったのです。

この小説は、今では筑摩書房、講談社の文学全集、岩波書店の文学大系に収録されています。全集本には、テキストだけでなく、作品に対する「解説」が付されているのが一般的です[文末の関連データ参照]。この解説にも、それぞれの出版社の個性が反映されていて比較するとなかなか面白く、講談社版は文学者、岩波書店版は専門研究者が解説していますが、なかでも筑摩書房版の文学史家、柳田泉による解説が面白い。筑摩版は、この小説の10巻までしか収めていないのですが、そのことについて解説者はこう述べています。「巻九あたりから、散士の東亜経営の志が次第にはっきりしてきて、佳人連の面影が薄れるとともに身边ドラマの興味が強くなる。」「身边ドラマ」と言っていることに注目してください。作者にとっては、小説の執筆より自国の国権の拡大こそが急務となり、国事に奔走している己の姿こそ表現すべき大事となったのでしょうが、文学の普遍的価値からすれば、それは「身边ドラマ」に過ぎないと解説者は言っているのです。その身边ドラマにおいて、作者自らもかかわった閔妃暗殺については1行、「後幾のちいくばくならず十月八日の変あり」と記されるだけです。「立国は私なり、公には非ざるなり。」とい

う福沢の言葉にもあるように、自らの行為を人類史的価値から相対化する眼を持ちえず、その行為を私的信義でも支えられなかった者は、文学的価値からも遠ざかったということでしょう。

最後に、歴史的変質の時代と書物とを関連させた最初の年表に戻って見てみましょう。いつ、誰が、どこで、何を言ったかが、歴史的変質と深くかかわっていることがわかり、藤田論文の最後の「歴史的変質はこのようにして精神の世界に訪れる」という1行が、一層よく理解できるでしょう。

この報告をするために、さまざまなデジタル・アーカイブ、図書館の資料を利用し、この読書ツールを使って処理いたしました。そこで見えてきたのは、読書という行為は、紙の本かデジタル・テキストかという選択を超えて、デジタル化の環境の中でも、その可能性を広げていくであろうということです。この報告を聞いてくださった皆様にも、その可能性が少しでも見えたとすれば幸いです。

- 1) 趙星銀訳『精神史的考察』、トルペゲ、2013
- 2) 李昆武絵著『傷痕』、三聯書店、2012。彼の自伝的マンガ『小李（シャオ・リー）から老李（ラオ・リー）へ』は世界各国語に訳されています（日本語訳『チャイニーズ・ライフ』、明石書店、2013）
- 3) 梁啓超の翻訳については、斎藤希史『漢文脈の近代——清末=明治の文学圏』（名古屋大学出版会、2005）参照。
- 4) ファン・ボイチャウ『ヴェトナム亡国史』（平凡社、東洋文庫、1966）なお「東洋文庫」収録の作品は全て、「ジャパンナレッジ」で見ることができる。
- 5) 梁啓超の訳は、商務印書館の編訳所による新しいシリーズ「説部叢書」の1冊として1902年に刊行される。中国古典の経史子集の四部の分類に対し、説部のシリーズには外国の翻訳小説が収められた。阿英『晚清小説史』（日本語訳、東洋文庫、1979）に引用されている梁啓超の「訳印政治小説序」も参照。
- 6) 東海散士の蔵書は福島県会津若松市立会津図書館に寄贈された。そのうち約400冊が洋書、世界各国の地理・歴史書が多く含まれる。なかでもアイルランド関係に特色がある。上野格「東海散士（柴四朗）の蔵書」参照。

#### 加藤敬事（かとう・けいじ）

1940年生まれ。1965年、東京大学文学部東洋史学科卒業、みすず書房に入社。1988年、編集長、1998-2001年、社長を務める。戦後日本の代表的出版物の一つ、『現代史資料』（全58巻）の編集を担当。その他、丸山真男『戦中と戦後の間』、藤田省三『維新の精神』、アーレント『全体主義の起原』等を編集。訳書に、王丹『中華人民共和国史十五講』（ちくま学芸文庫）がある。現在、東アジア出版人会議理事。

## 「歴史的変質の時代」年表

- 1874 板垣退助ら「民撰議院設立建白書」
- 1881 国会開設の詔。自由党結成
- 1884 甲申政変、金玉鈞ら日本に亡命
- 1885 「脱亜論」時事新報に掲載  
東海散士アメリカ留学より帰国
- 1885-6 東海散士『佳人之奇遇』第1~4編刊行
- 1889 大日本帝国憲法発布
- 1890 第1回帝国議会開会
- 1891 『佳人之奇遇』第5編刊行  
福沢諭吉『瘦我慢の説』脱稿。  
→「立国は私なり。公には非ざるなり」
- 1894 金玉鈞、上海で暗殺される
- 1894-5 日清戦争
- 1895 乙未事変（閔妃暗殺）、乙未条約（下関条約）  
『佳人之奇遇』第6~8編刊行
- 1898 戊戌政変、梁啓超は日本に亡命。  
梁啓超訳『佳人之奇遇』、「清議報」に連載  
福沢諭吉、『瘦我慢の説』刊行
- 1901
- 1904-5 日露戦争
- 1905 ファン・ボイチャウ『ヴェトナム亡国史』、  
梁啓超の序で刊行（1966、東洋文庫）
- 1910 韓国併合  
『自由党史』刊行、板垣退助「題言」  
（1958、岩波文庫）  
→「憲政有終の美是に於てか済り、国運の  
隆昌、天壤と共に際りなからん」

## 『佳人之奇遇』関連データ

### 【原本画像】

国立国会図書館 近代デジタルライブラリー  
東京都立図書館 デジタルライブラリー  
早稲田大学図書館 古典籍総合データベース

### 【日本語デジタル・テキスト】

うわづら文庫 改造社版 PDF  
日本古典文学テキスト 春陽堂 明治大正文学全集版（1930）文字データ

### 【日本語活字本】

『日本現代文学全集』3（政治小説集）、講談社、1965 中村光夫解説  
『明治文学全集』6（明治政治小説集2）、筑摩書房、1967 柳田泉解説  
（全16巻のうち10巻まで）  
『新日本古典文学大系 明治編』17、政治小説集2、岩波書店、2006  
中丸宣明解説（11～16巻は小字）

### 【中国語訳】

劉孔璋訳『佳人之奇遇』満洲報社（大連）出版部、1935  
新会梁啓超任公著『佳人奇遇』中華書局（梁啓超専集）、1947

### 【参考文献】

阿英『晚清小説史』（日本語訳、東洋文庫、1979）  
斎藤希史『漢文脈の近代——清末＝明治の文学圏』名古屋大学出版会、2005